

黒の三連腐 十一
kuro no sanrenpu



狂乱 日記 八雲

此系
藍血



黒の三連腐 十一

kurono sanrenpū



狂 白 記 亂 人 雲

此
系
誌

R-18

狂乱ハ雲日記

ちよも

瀬浦 忍

ひで@き

--ゲスト----- ✨

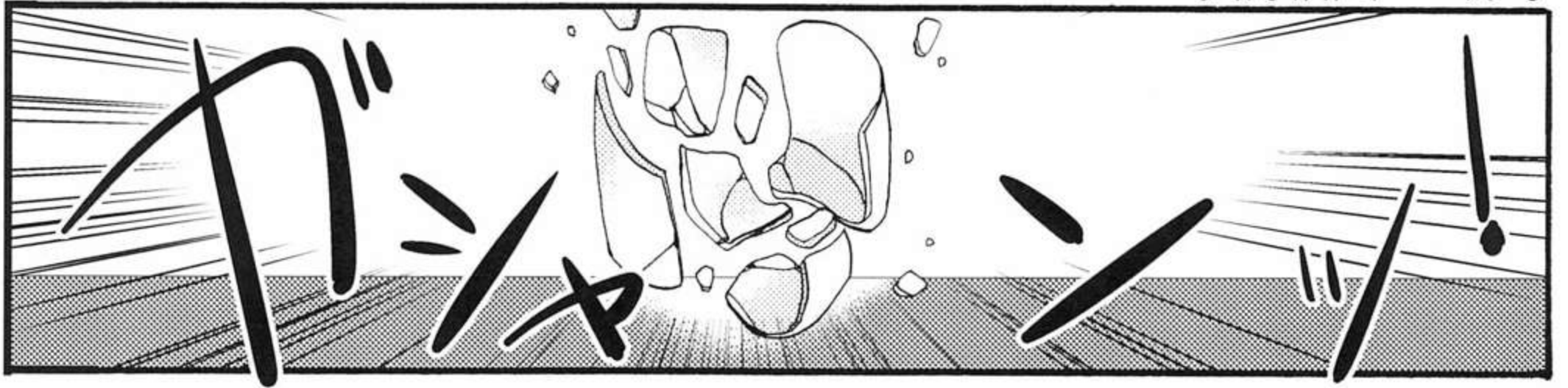
久遠 社

碧愛 こず

いくたたかのん

(敬称略)











悪いコト
したでしょう？



橙

んんん



ふん

んんん



お仕置きしてあげる



ふふ
気持ちいいの？



ズニ
ウ
これじゃ
お仕置きに
ならないわ



はは
はは



「やあ」

音も無く現れた客人に驚くこともせず、博麗の巫女は気だるげに振り向いた。

「こんにちは。何をしに来たの」

「つれないね」

苦笑する八雲の式の背後から猫が飛び出す。

「巫女！巫女！魔理沙は？魔理沙はいないの？」

「いないわよ。なんで魔理沙がうちの神社にいないくちやいけないの」

「だっていつでもいるでしょ、ここに」

「いつでも、ってわけじゃないわ。あいつはどこへでも行くしどこにもいるもの」

「じゃあここにもいるってことだよね」

言葉に詰まる霊夢に「一本取られたな」と笑い、藍は持参した包みを差し出した。

「美味しそうな饅頭を頂いたのでね。私たちだけで食べるには量があったから、一緒にいかがかな」

「白玉楼にでも持っていけばいいじゃない」

「幽々子さまから貰ったの？巫女はいつもおかしなことを言うね」

「これ、橙」

嗜めながらも藍は笑いを噛み殺し切れずにいる。憮然としつつ包みを受け取って、わざとらしく溜息を吐いた。

「どうして八雲の連中は揃いも揃って自分の子供に甘いのかしら」

「子供じゃなくて式だけどね」

「似たようなものでしょ」

甘いのは否定しないのかなどと無粋なことは心の内に留めて、霊夢はこの饅頭に合う茶を淹れるために歩き出した。

湯飲みの用意は三つでいいだろうか、それとも猫には茶以外のものがないだろうかなどと考える足取りは、軽い。

やくもつづり

瀬浦 忍

一口啜った茶の芳香が鼻腔を擽る。特有の渋みはあるものの不快にはならず、むしろ若々しい苦味が餡子の柔らかい甘さと調和して芯から味覚を楽しませる。食の愉悦は生きる上で必須項目ではないが、敢えて避けることでもないので藍は積極的に甘受することにしてた。

「美味しそうに食べるわね、相変わらず」

呆れた様な感心したような声の霊夢だが、同じように饅頭、茶と口に含んで味わえばその表情は大差ない。

「饅頭も美味いが、茶も美味いな。これは良いものだね」

「……まあね。ちよつとした貰い物なの」

含みを持たせた言い方だが、この巫女は時折こういった口調になるので然程気にも留めず、藍はもう一口湯飲みを傾けた。

「やっぱりあの子にはお茶はいらなかったわね」

「まあ、猫舌だからね。少し冷めたら飲むだろうさ。あの分だときつと喉が渇く」

視線の先では橙が鳥を追いかけ走り回っている。体力を消耗しきつて式が剥がれてしまう前に止める必要があるだろうが、きやあきやあと笑いながら夢中になっているこの状態では咎める声も耳に届くまい。

「子供ね」

「否定はしないでおくよ」

己を律することが大人の条件であるのなら、今の橙はそう呼ぶに相応しくはない。ひどく心を躍らせるものが目の前にあったとしても耐えなければならぬ、そんな状況は幾らでも降りかかってくるものだ。そこで乗り越えられるか膝を屈するか。今の橙にはまだ早いにしても、いつか必ず試される時が来るだろう。

だから、今はそのままでもいいと藍は思っている。

「甘いかな」

「私が何を言っても決めるのはあんたたちで、その結果あの猫がどう育とうとそれはそつちの話。まあ騒ぎを起すようなら止めるけど、少なくともそつちはならぬでしょうね、あんたなら」

突き放したような言い方だが巫女なりの答えだと知っているので、藍はそうかと笑った。

「で？結局何をしに来たの。お茶啜りながら子育て相談しに来たわけじゃあないんでしょう」

「相談料が必要な」

「もう貰ったわ」

二つ目の饅頭に噛り付きながら視線で問いかける霊夢に、誤魔化すことを諦めて藍は本題を切り出した。

「——紫様は、こちらには」

「来てないわ」

あつさりと返され、落胆することも出来ない。

「なあに、まだ帰ってないの」

「ああ」

近頃境界が騒がしいから様子を見に行く、そう言って主である八雲紫がふらりとなくなってもう一ヶ月になる。

「そう珍しいことでもないじゃない。いつも寝ているかどこかへ行っているかのどつちかなんだから」

確かに今回に限ったことではない。今までも予告さえ無く家を空けることは多々あった。その度に藍は紫の代理を務めながらただ帰りを待ち続けて日々を過ごしていた。

心配などは無用だと知っている。紫の力は式である藍自身が誰よりも理解しているからだ。だが気まぐれに境界を漂う主の行動は、短くない時間を共に生きている藍にも理解の範囲を遥かに超えてしまっている。

まだまだだね、と紫は笑うだろうか。もっと精進なさい、と紫は叱るだろうか。その声も表情も今は遠い。

不在の間に博麗神社の様子を見に行くことも託された役目の一つではあるのだが、ここ数日足繁く通っているのは責任感からの行動ではない。単純に、人恋しいだけだ。紫がいないのであれば、紫をよく知る誰かと接していたい。それだけのこと。

「近いうちに帰ってくるでしょ。ここより先に、あんたのところへね」

その視線が僅か頭上に投げられていることに気付かない位、藍は限界に近かった。

「甘いわね」

全てを見透かしたように呟いて、霊夢は小さく笑った。

「おかえりなさい、遅かったわね」

帰り着いた八雲の家では、当たり前のように屋敷の主が笑っていた。

「紫さま！」

歓声を上げて飛びついた橙を軽々と受け止めた掌は、そのまま優しく髪を撫でる。

「おかえりなさい紫さま！」

「あらあら、いい子にしてたかしら？」

「はい！橙とってもいい子にしてみました」

「元気に遊んでいたみたいね。服がこんなに汚れてしまっているわ」

あ、とその言葉で思い出したのは数時間前のこと。訪れた神社の境内で無我夢中で鳥を追いかけまわっていた途中で何度か転んで砂まみれになってしまっていた。着替えることなんてしてないので汚れたまま、この状態で抱き着こうものなら汚れが移ってしまうに違いない。もう遅いかもしれないけど紫の服をこれ以上汚すわけにはいかない、と離れようとした橙の身体は柔らかく引き留められた。

「うふふ、子供は元気が一番ね」

「……はい！」

嬉しくなつて、橙は紫の胸元に頬を寄り寄せた。暖かくて、いいお

いがする。

「おかえりなさいませ、紫様」

「ええ、ただいま。藍」

「お疲れでしょう、すぐに夕餉に致します。それともお風呂になさいますか。準備は整っています」

「じゃあ、お先にお風呂に入ろうかしら。その間にご飯の支度も出来るでしょうし」

「畏まりました。今少しお待ちを」

頭の上で交わされた会話はいつも通りのもので、一礼して風呂の湯加減を確かめに行った藍の様子にも何もおかしなものはない。

だから、橙は少しだけ二人に意地悪を仕掛けてみた。

「紫さま、橙も一緒にお風呂してもいいですか？」

紫がいなくて淋しかったのは、藍だけの話ではないのだから。

——浴室は温かい湯と立ち上る湯気に満ちている。

「ちゃんと肩まで浸かって、百まで数えましょうね。百まで数えたら上がりましょう」

「はあい、紫さま」

水に弱い式故に普段の入浴は行水に近いが、藍や紫と一緒に風呂は好きだった。優しく髪や身体を洗ってくれることもくついたりまま湯に沈むことも、橙に与えられた特権なのだから簡単に剥がれているわけにはいかないのだ。

「上がったらご飯が待っているわ。きっと今日は藍が腕によりをかけているはずだから」

「楽しみですね、橙おなかペこペこです」

橙と二人の食卓でも、或いは藍一人だけの食卓であっても手を抜くことはないが、紫がいるとあれば発揮される能力は桁が違う。長不在から帰還したとなれば尚更のこと。いつ主が帰ってきてても良いようにと買い揃えられていた食材たちも、やっとその舞台を迎えられるのだから晴れがましいに違いない。

「ねえ、紫さま」

後ろからぎゅつと抱かれながら、橙は数字の合間に言葉を紡ぐ。

「ご飯食べたら、橙は帰りますから」

「あら、と紫は笑う。

「ごうごうの、何でしたっけ。あとは若い二人で、ごゆつくり？」

「ちよつと違うかしら」

どこで覚えてきたのとかからかう声が耳にくすぐったい。

「夜道は危ないから、スキマで送ってあげるわ」

「ありがとうございませ。明日は来ても大丈夫ですか？明後日か

明々後日までお邪魔しないほうがいいですか？」

「まあ、おませさんね。じゃあ、明日用事をお願いしてもいいかしら」

内緒ごとのように密やかな声で頼まれた用件に頷いて、橙は残りの数字を数え出す。

「ごうごうね」

重ねられる声が生かすじわりと心にしみ、泣きたい位に温かい。

「おかえりなさいませ、紫様」

スキマを抜けて猫の里へ届け、そのついでに夜の月を楽しんで帰った紫を藍は跪き拱手で出迎える。

頭を下げていたためにその表情を見ることは出来ないが、僅かに震えているその声で様子を窺い知ること出来る。

「ただいま」

薄い笑いを浮かべ、その正面に腰を落として紫は語りかける。

「不在の間、変わったことは無かったかしら」

「大きな事件や異変はありません。小さなことは、幾つか」

「そう。結界に異常は？」

「影響は微細かと」

「あら」

トーンを落とした声に藍の肩が震える。恐る恐る上げた顔には怯えの色が滲み、紫を見返す瞳が小さな子供の様に揺れている。

「北の二十七番と東の三十五番が少し弱くなっているようですわ。どういふことかしら」

「あ——」

光弾で撃たれたかのように眼を見開き、次の瞬間倒れんばかりの勢いで藍は身を伏せた。

「申し訳ございません紫様。私の、私の管理が至らないばかりに」

「言い訳はしないのね。潔いのは嫌いじゃないわ」

嘘よ、と紫は囁きかける。

「どちらの結界にも不備はないわ。あなたはもつと自分の仕事に自信を持ちなさいな。それとも、自分の力が信用できないのかしら？それはつまりあなたを信用して不在を任せられたわしのことも信用できないってことになるのだけど」

「滅相も——滅相も」

紫様、と縫るような声を絞り出しながらも再び顔を上げることは

しない。

ああ。

ぞくりぞくりと紫の背中を昏い熱が駆け抜ける。

「ねえ、藍」

伏せた背中にそうと指を這わせる。

「あ」

零れ出た声は怯えと恐れ、気付き始めた熱を帯びて夜に響く。

「これじゃあ、安心して家を空けることが出来ないわ。そう思わない？仕事はちゃんとしているのに、ちよつとつかれたくらいで自分の力で成した結果を信用せずに謝ってしまうなんて、未熟な証拠だわ」

本心からの言葉ではない。己の式の能力は主である紫が誰よりも知っているからだ。

だからこそ。

「ねえ、藍。そう思わない？」

「はい……はい、紫様、あ」

背中に円を描いていた指先を首筋に触れさせると、藍の身体がひくりと跳ねた。爪先に掛かる吐息に混ざる熱が密度を増している。

懇願の滲む声をもっと堪能したくもあつたが、きちんと仕事をこなしていた良い子には「褒美をあげなくてはいけない」。

「ねえ、藍」

首筋から流れて頬へ、指先から繋がる掌でその顔を持ち上げる。

紅く縁取られた瞳は涙で濡れ、小さくわななく唇は薄く開かれ微熱交じりの吐息を零している。柔らかい皮膚の頬に伝う滴を指に絡めて、紫は愛しい式に語りかけた。

「淋しかった？」

途端、藍の表情が決壊する。同時に弾かれたように起き上がり、

「——はい、紫様、紫様、淋しかった、です……！」

幼子の様に紫へと縫り付き、何度も名を呼んでは身体を摺り寄せてくる。

「あらあら」

受け止めながら、紫は愉悦を隠さずに笑う。

「素直な子。いい子ね。そうね、わたしも淋しかったわ、あなたに触れられなくて。だから、今夜はいっぱい可愛がってあげる。付き合ってくれるかしら？わたしの可愛い藍」

はい紫様、と返す瞳は、既に別の涙で濡れていた。

「——ああああ、あ、紫様、紫様、つあああ、あ！」

高く突き上げた双丘を貫かれながら、既に何度目かもわからない絶頂へと至る。

「あああ、あ、紫、様、のが、つあ、いつぱい……」

注がれる熱い進りを歓喜で受け止めて、それでもまだ満ち足りることは無い。

「紫様、もう……もう一回、ください、紫様の、藍にください」

「いいわよ。そのかわり」

綺麗になさい、と突き出される陰茎は二人分の体液に塗れどろどろに成り果てて、眩暈がするほどに美味しそうだ。

「はい……んむ、っふ、ちゅ」

舌を巻きつけるように絡ませ、唾液を馴染ませるように砲身と指で擦り付けると忽ちにそれは硬さを増して反り上がる。

「ああ、紫様のおちんぼ、またこんなに……んん、は、あ、んっ」

「ええ、上手よ、藍」

夢中で舐め啜えている頭を撫でる掌にさえ反応して身体が疼く。身体のとこを触られても快感に繋がりに、更なる刺激を求めて全身を駆け巡る。

「はしたない顔ね、藍」

唇と陰茎の淵を紫の指が辿る。抉じ開けた隙間に差し入れ掻き回され、口腔に溢れていた体液雑じりの唾液がだらりと流れ出てしま

うが舌を指先で絡め取られているせいで追いかけることが出来ない。

「ゆか、り、さ、まあ……」

陶然と名前を呼び、張り詰めたそれに頬を摺り寄せる。怒張した陰茎は華奢な紫の身体には全くのミスマッチで、だからこそ藍はひどく乱されてしまう。

紛い物を生やさずとも褥を共にすることは出来ようが、これはひとつの儀式のようなものだ。

夜毎注がれる新しい命令は即ち令であり、命である。屈服させ式を打つ、その様式の一審判り易い有様であり、また獣である本能を二人だけで潤すことの出来る野蛮で清冽な行為。

時折自分にも生やさされるそれで紫を抱くこともあるが、式である藍が主である紫を犯すことは何よりも背徳と悦楽の極みを感じさせた。

「っは、んん、紫様、っ」

もう、とねだると紫は艶然と頷き、浅く喘ぐ唇を封じ込めるように唇を重ねてくる。口腔を掻き回す舌が意識の境界を乱していく。

「ん、っ……ふふ、可愛い、藍。ほら、もつと鳴いて魅せて……ッ」

曖昧になりかけた瞬間に怒張しきった陰茎で貫かれ、藍は仰け反って悲鳴を上げた。

「っつああああ——、っ……きた、きた、紫様のおちんぼきたア……」

捻じ込まれた熱の塊で神経まで焼かれてしまいそう。それだけで達してしまいそうになる藍の耳に、蜜の様にねっとり甘い声が流し込まれる。

「熱いわ、藍の中。ねえもう何回もイッているのに、まだこんなに締め付けてくるの。どれだけ欲しがっているのかしら。この淫乱狐」

「ゆか、紫様、ああ言わないで、そんな……ああ、あ、あ、奥まで、一番奥までちんぼだめえ！」

「嘘をおっしゃい、突かれる度にきゆうきゆう銜え込んで離さないくせに。ねえ気持ちいい？わたしのちんぼは気持ちいい？」

はしたなく身体全部を開かれて意識までどこまでも晒されて、もう何も考えられなくなってしまう。

「紫様ッ、紫様あ……！きもちい、紫様気持ちいい、イあああん！」

それでいいのよ、と紫が囁く。

「わたしのことだけ考えてなさい。わたしの藍。やらしくてはしたなくて可愛い、わたしの藍」

ひくひくと揺れる獣の耳に歯を立てて、紫は抉るように腰を撃ち付ける。最も奥まで捻じ込むように、意識まで刻み込むように激しく狂ったように穿たれながら、藍は何度目かの絶頂へと昇り詰める。

「ツああ、あ、イク、イク、紫様、紫様ああ、ああ、イク、ッ……！」

「ああ藍、藍、全部出すから受け止めて飲み干して、っ——！」

何度でも幾らでも満たされるまで続く、夜が明けるまで。夜が明けても。

「——んにーちはあー」

足音を消すことも無く近づいてきた客人は、わざとそうしなかったのではなく能力的に未熟であるからだ。彼女の主とその主の域に達するまでは、まだ暫くかかるに違いない。

そう考えながら、博麗の巫女は凶兆の黒猫へと顔を向けた。

「いらつしやい。参拝に来たの？なら賽銭箱はあつちよ」

「違うもん、今日は紫様のお使いで来たんだから」

えっへんと胸を張る。いかにも子供らしい仕草に笑みが零れるくらいには警戒心を薄め、霊夢は橙を迎え入れた。

「それはそれは。で、用事は？」

「んーとね、これ。おみやげだつて」

差し出された包みは見慣れない包装だった。印字されている店名にも覚えがない。あのスキマ妖怪はどこをほっつき歩いていたのだろうか。

「つていうか、昨日見に来た時にでも置いていけばいいのに」

「え？何か言った？巫女」

「なーんにも。折角だから、茶でも飲んでく？客用にしろつて貰ったのがまだあるから」

「おいしいの？」

「昨日も飲んだじゃない……まあ、美味しいんじゃないの。あんたんとこのが持つてきたんだから」

甘いわよねと霊夢は呟いて、歩き出す。

「？お茶は苦いよ？巫女はおかしなことを言う」

「はいはい、あんたはまだわかかんなくていいわ」

もうちよつとそのままでいなさい、と霊夢は笑った。

大人になるにはまだ早い。

順番は、きつともう少し後だろうから。

「そっいえばあの二人はどうしたの」

「うーん、紫様と藍様なら今日はずっとお布団で仲良ししてるんじゃないかな？久しぶりだからね、邪魔しないほうがいいよね」

「……………やだあんた、大人ねえ」

幻想郷は、今日も正しく穏やかである。

パラダイスはんてい

やくもっこり

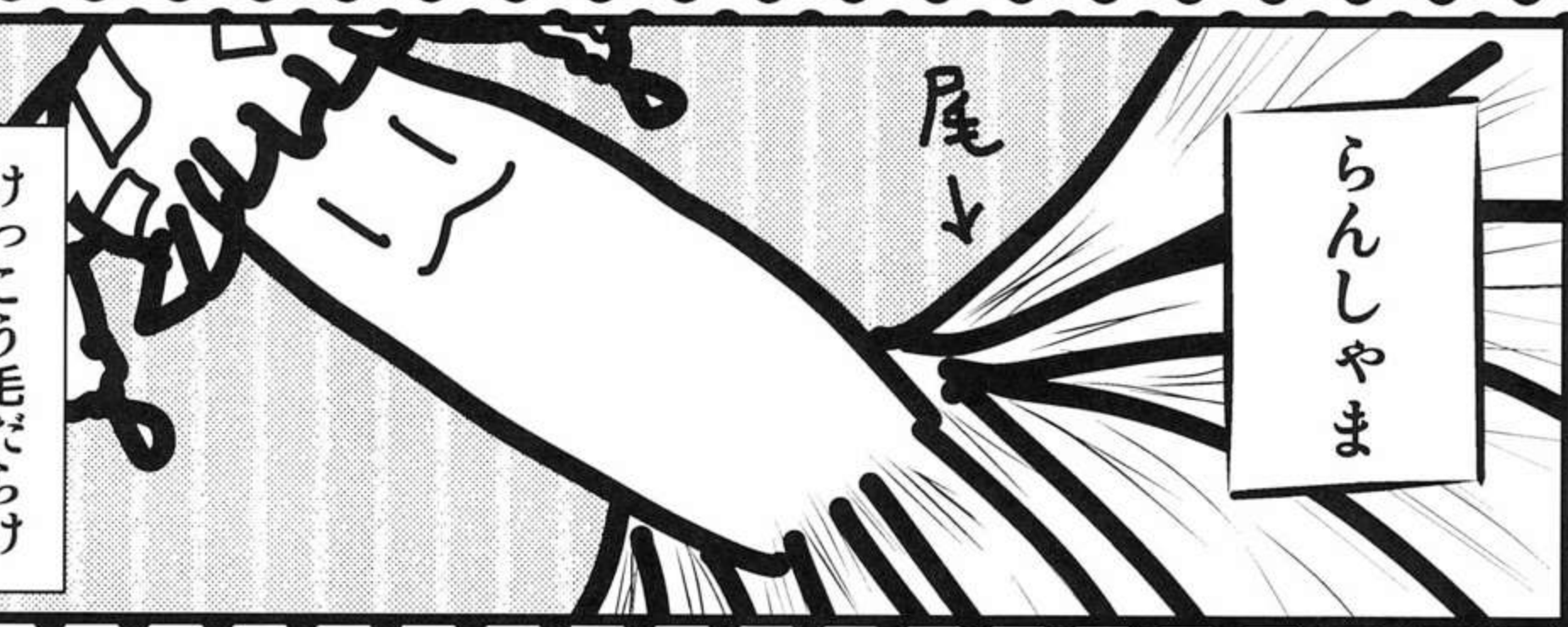


一家の男根
大黒柱的存在。
すごいでかい
すごいかたい



ゆかりん

けっこう毛だらけ
いっぱい出すので
紙が追いつかない



尾↓

らんしやま

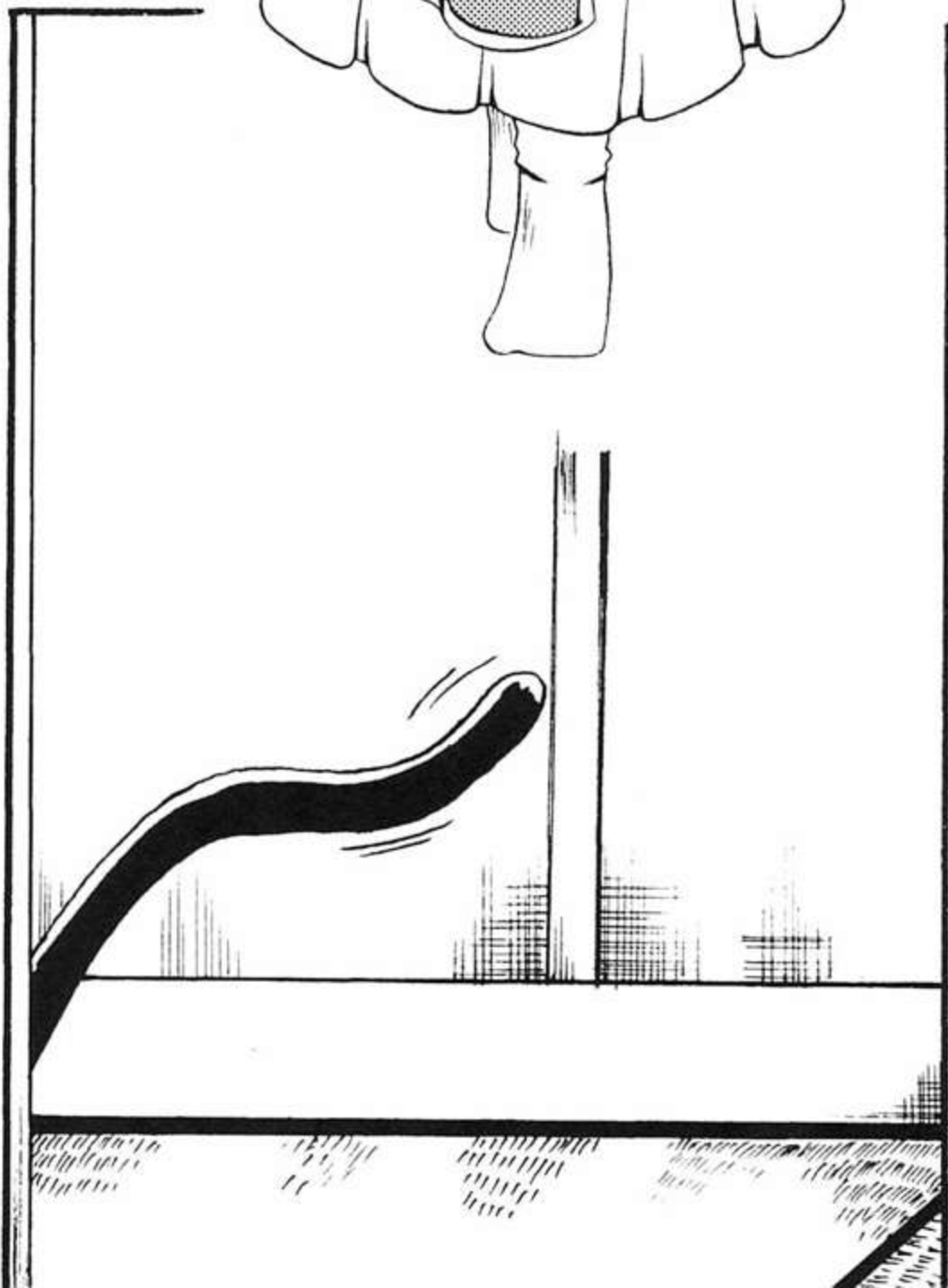
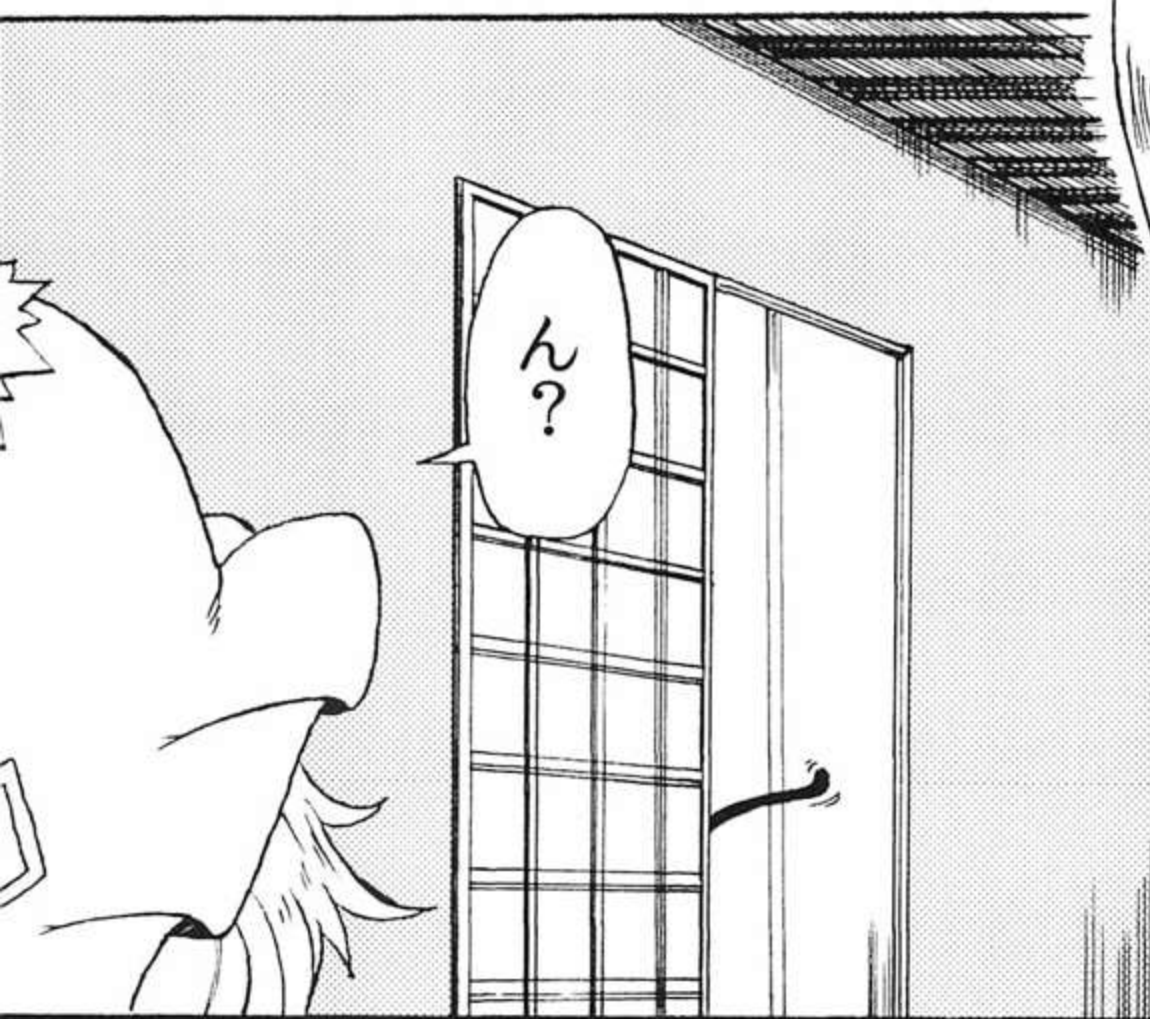
玉

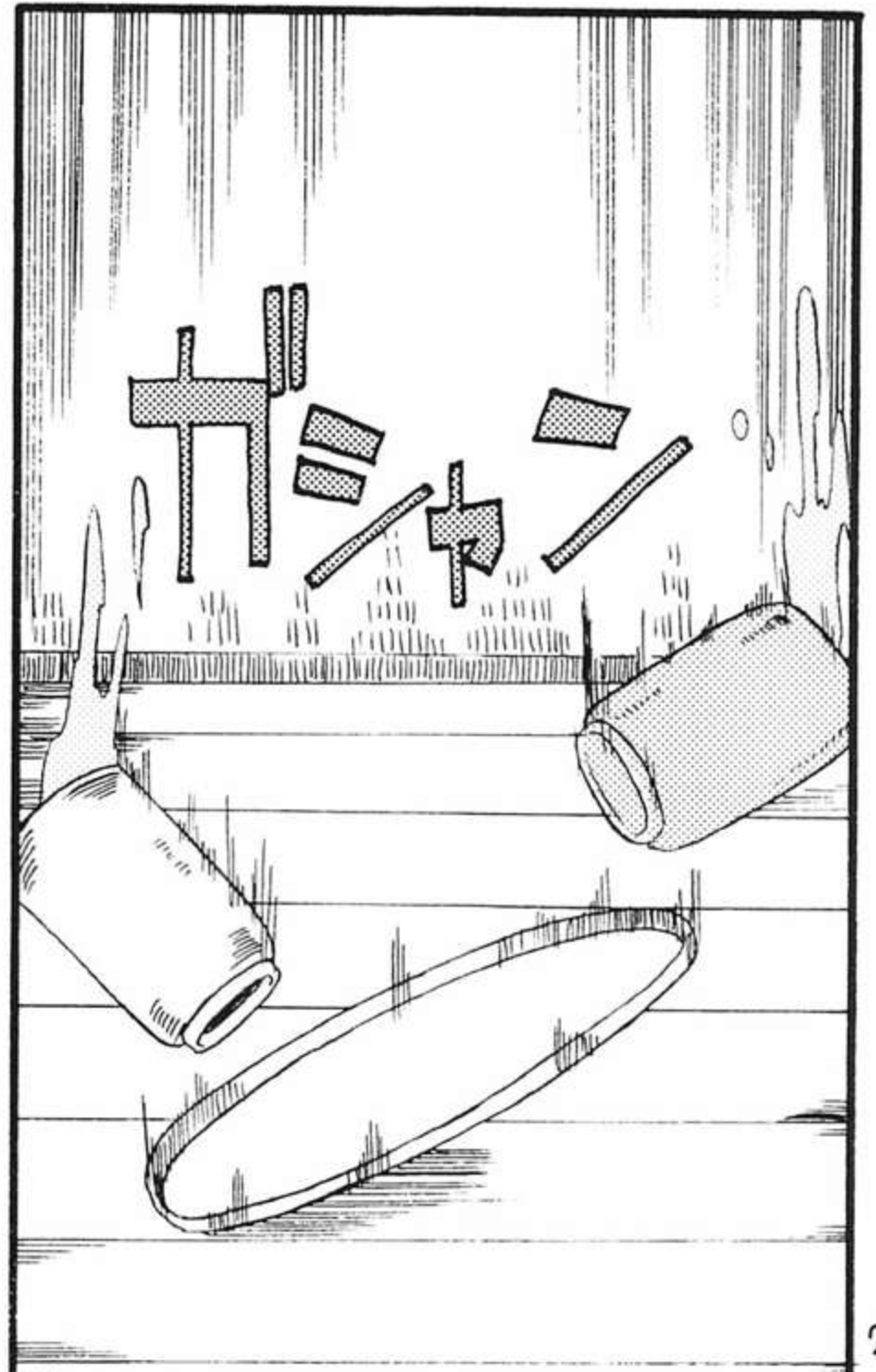


ち○ん

←ここから
ゲストさまです！









ちえ…ん？

誰って…
え？



藍さま…

誰ですか
その猫は…

ポロロ



藍さまの
薄汚い変態
ロリコンド畜生
淫乱女狐エエエエ!!!

ちえんえんえんえん!!

あの子私のこと判別できてないのかしら…

本
当
は
あ
と
が
き
用
に
描
い
た
ん
だ
け
ど
思
い
切
り
A
4
フ
ル
サ
イ
ズ
で
描
い
た
ち
や
っ
て
縮
小
し
た
ら
線
が
汚
く
な
っ
ち
や
っ
た
の
で
あ
と
が
き
は
大
胆
に
ト
リ
ミ
ン
グ
し
ち
や
っ
て
一
枚
絵
と
し
て
こ
の
絵
を
載
せ
よ
う
と
し
ま
し
た
。
で
ち
よ
も
僕
は
オ
リ
ー
ブ
オ
イ
ル
。



発情藍さま鎖に繋いでギリギリ届かない所で
公開自慰ゆかりんお題をいただいたけど再現率低



だめめっ
ギリギリ届かないで

あらあら
ひどいお顔ね

我慢の効かない子
は嫌いよ?

ふんふん...

ふんふん...

G!

~~このお登が子にうたかたをうたかた~~
お登は子に。目にはうたかたをうたかた
うたかたをうたかた!
うたかたはうたかたをうたかた
うたかたをうたかた若干
うたかたはうたかた



景さんの恋人。

という名前と女をいらいをまて
1心倒したい!



トシは
ユキ
ミウの
カケ。

服は
とらない。

しんぶん
とか
おとす
か。

あーっ

ふ
ふに

さう
さう

棒
棒
棒

Uchihara
2012 May

ゲストさまコメント★★★★★

ゲストの社です。こんにちは。
三連腐合同の発行おめでとうございます。
いつもの大人な紫も好きです。
香霖堂の小さい紫も好きです。
個人的に狸耳を推していたんですが
三月精の狸とかマミソウとかで
狸粹埋まっちゃってこれからどうしよう。
やっぱり時代はいぬゆかりでしょうか。
八雲本のはずが紫の話しかしてない。
橙かわいい。藍さまカッコいい。よし。
それではお誘いありがとうございましたー。

久遠社
<http://kuon846.web.fc2.com/>

久遠社

碧愛こず

狂乱家族八雲日記発行おめでとうございます。

ゲスト参加お呼びいた頂き
ありがとうございました！
八雲さんちのかたたちかけて
たのしかったです。

普段は狂乱家族日記かいてる
碧愛こず
<http://ichigoyoukan.blog.shinobi.jp/>

●「南くんの恋人の漫画版のイラストは、1はたまた
ちみがるとしたように事故でなくなるんです
が、南くんのめんどめんどでた気がするし、たまた
紫様あんまりしなごうで、プロ。でい。ー
●とまあ三連腐いっしょに合同誌発行
おめでとうございます!! たしんいっしょ!!
久しぶりに七海に自分の意志のみで
暴走意味に描いたのしかたかし!! あがかし!!

小こに
仕た
ま...

ス...

いいたたかのん



ゲスト三名様大好きです!ありがとうございました!!



ちょも

このたびは三連腐の本をお手に取って頂き
ありがとうございました！！
編集担当のチョモッシュです。
まさか、やしれいぷから始まり色々
紆余曲折して八雲本が出るとは夢にも
思いませんでした！三連腐わ…ズッほも

ちょもとしてはほのぼのえろを描こうと
して失敗。大人と子供の
わがままのお話に…
ちっさいこを描くのは
楽しかったです><

現在はヴァンガード 權アイ中心
銀魂(銀新)など女性向け中心で活動しています。
詳しくは→<http://mintjulep.dou-jin.com/>



瀬浦 忍

祝☆ポケットモンスターやくもけ(仮)

言いだしっぺのくせにチョモッシュ全任せでごめんなさいセノーラです
ヒデアも付き合わせてごめんなさい大殿(語尾
三連腐わ……ズッ友だよ……！！
ママもこずサンも巻き込んでごめんなさい地下帝国よ永遠に
やしろさんはれいぷ

初東方初八雲家超楽しかったです
もっとおっぱいおっぱいさせたかったナ……★

紫様も藍様も橙もお互い大好きであればいい。
そんな主張でした。
やしろさんは、れいぷ(二度目

普段はPKMNやってます DPtでボス27歳とチャンピオンでERO
<http://betty.jp/yukiwanitakanoha/>



限りなく男根に近い何か

ひで@き

ひで@きゅ描いた……
ミレンぷがまってる……でも……もうおんかきへたで……
でも……あきらめるのよくないって……
ひでゅ……おもって……がんばった……でも……
ネタ…ダメで……が…ひん……ゴメン……
エロいのできなかった……でも……
ミレンぷとやしれいぷゅ……
ズッホモだよ……！！

くろいさんちゅぶ
レフ"ア"



誰なの!!

黒い三連腐の本を
ご覧いただき
ありがとうございました。



黒の三連腐は誰も逃がさない

狂乱ハ雲日記

発行：黒の三連腐
発行日：2012/5/27
印刷：オレンツ工房さま

mail：
cordless@hotmail.co.jp(ちよも)



※転載、複写、ネットオークション等一般の方の目に触れる
場所への転売等にご遠慮ください
※18歳未満の方の閲覧を禁止します



2012.5.27 黒の三連腐+++

